

また、天保12年6月上掲の赦免沙汰書を受けた林良伍〔通明。珍平の子〕が記した文中に『……終に寛永五年水無月末の一日帰らぬ道に旅立ちぬれば公に聞えあげて北山龍雲院に仮の葬りしつ しかあるにはからずも今年二月東都市の司遠山左衛門尉景晋〔元の誤り〕の許より友直の生死身よりを尋ねさせ給ふとのことを公の予に問はせければ友直はとく此世をさりてことし百年の半に一とせたらぬよし聞えあげたるに柳営の太政大臣に進ませ西の御所の一位に昇らせ給ふ〔第11代將軍家齊任太政大臣、世嗣家慶叙従一位、文政10年3月18日の昇進を指しているが、子平の赦免は沙汰書に明記してある通り文政5年3月1日の叙任の時であったので、この個所は誤まっている。〕御祝ひの御赦しに友直の罪をゆるさせらるる旨を時の執権〔老中〕浜松侍従水野越前守忠邦朝臣より伝へ賜りぬ いかばかり苔の下にもよろこびけむとたゞちに塚にまうでそのことを告げし折に通明「なきたまもうれしからまし君か代の恵みにもれぬ道をおもへは」とおもひつづけていさゝかそのよしをしるし後の世に伝ふるのみ』〔この全文を刻んだ林子平碑を良伍の子通貴が明治10年4月子平墓の左傍に建てた。〕なお、子平墓の墓銘の筆者について「六無齋逸話集」(今泉篁洲編 「増補六無齋全集」第4冊、林次郎〔等〕編「増補六無齋遺草」の内)に次の記事がある。『白石良元云く、寛政五年六月廿一日林子平先生禁錮中死去せられしを以て、供養の小さき碑を建てられたるに、其当時仙台藩の禁制を犯したる廉を以て、其小碑に金網を鎖されたりと。後天保十二年丑七月二日、大番頭泉田佐渡殿より子平赦免の御達しあるを以て、子平君の姪なる珍平氏が我家に至りて、先代白石権太夫に「六無齋友直居士」と墓碑名の揮毫をたのみ、新たに碑を建てられしと云へり。』

資料 増補六無齋遺草(林次郎〔等〕編)

林子平伝記(鈴木省三)

宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告第12輯(宮城県史蹟名勝天然記念物調査会)

奥羽観蹟聞老志補修篇(伊勢齋助、「仙台叢書」〔別巻4〕の「奥羽観蹟聞老志(下)」の内)

3. 引地正右のこと

問 「引地正右」の読み方と、仙台志料の中に書かれているというこの人物についての記事(原文のまま)を教えてください。
(1)

答 引地正右は「ひきちょうう」と読み、正しくは引地正右衛門のことです。例えば、大久保彦左衛門を大久保彦左と呼ぶたぐいです。昔は、よくこのように、人名を省略して呼んでいます、決

して疎略な扱い方ではなく、むしろ敬意をもってした場合が多いのです。古文書などに、よく現われているところです。

「仙台志料」巻之3（岡千仞）に「引地正右」の項目をたてて、次のように記してあります。

『文化年間。嚴霜枯稔。⁽²⁾遠田田尻里正引地正右発官倉俵粟播。邑民四集。尽数頒与。郡官召詰之。曰小人擅發官倉。為罪甚大。⁽³⁾然農国本。⁽⁴⁾今苗咸枯。若白公府俟稟準。遽緩数日。大事已去。莫論租税。人民坐成餓莩。⁽⁵⁾吏縛正右。送治繫獄廿日。輒免。已而擢正右為保正。⁽⁶⁾謹保正以下。抱泥文法。⁽⁷⁾不弁緩急之罪。』

注(1) 仙台出身の漢学者岡千仞〔おかせんじん〕著、18巻3冊、明治30年2月20日刊。当時、世に知られていなかった仙台藩の人物・事物等について、伊達家所蔵の文書記録に当て明確に記述している。漢文体。郷土資料の基本とされる名著である。

注(2) 天保4年〔1833〕仙台土樋に生れ。幼名慶輔、天保10年啓輔と改めた。弘化4年〔1847〕頃名を棟〔てい〕字を子文、嘉永5年〔1852〕江戸遊学後名を修、字を天爵、慶応末年名を千仞、字を振衣と改めた。鹿門の号は万延元年〔1860〕京坂旅行に際し、大槻磐溪の指示によって、若くして死んだ叔父清治の号「鹿門」を用いることにしたものである。江戸昌平校に学び、卓抜な学力を認められて舎長となった。同窓の秀才、重野成斎・松本奎堂・松林飯山・南摩羽峰等と深く交わり、後に奎堂・飯山とともに双松岡塾〔松本奎堂と松林飯山の松と岡千仞の岡をとって名づけた。〕を大坂〔大阪の表記は明治以後〕に開いて人材の育成に努めた。当時尊王攘夷論が盛んで、志士清川八郎らとの接触もあった。戊辰戦争が起り、奥羽越列藩同盟が成立した時、千仞は、仙台藩が状勢判断を誤らぬよう奔走したが、藩の執行部の怒りをかい、逮捕投獄された。戦後議事局議員となり戦後処理を議した。また仙台土樋自宅の書齋を「草私史亭」と称して詩文・歴史の述作に励み、更に学校麟経堂を創設し子弟を教育した。片平丁小学校の前身である。やがて新政府に招かれて上京、太政官修史局、東京書籍館長の職についたが間もなく辞職した。それ以後在野の学者として、著述に専念し、後進に文章を教授した。すこぶる博覧強記、詩文にすぐれ筆をとれば一気に完成したという。尊攘記事・同補遺・米利堅志・仏蘭西志・琉球始末・涉史偶筆・螢雪事業・北游詩草・仙台志料・蔵名山文稿等多数の著作がある。大正3年2月18日東京で歿した、82才、目黒裕天寺に葬る。千仞の詳伝に「鹿門岡千仞の生涯」（宇野量介、昭和50、岡広発行）がある。岡鹿門〔おかくもん〕を小倉鹿門〔おぐららくもん〕と誤まる質問者が多いので注意を要する。小倉鹿門は長州毛利家の侍読、名は実廉通称彦平、安永5年〔1776〕10月歿、74才。小倉尚斎の子。

注(3) おう。苗のこと。

注(4) 肝入〔きもいり。肝煎〕の漢語表現。

注(5) がふ。餓死すること。

注(6) 大肝入（大肝煎）の漢語表現。

注(7) 成文法

資料 仙台志料上巻（岡 千仞）

仙台人名大辞書（菊田定郷）

東藩史稿巻之32（作並清亮）

4. 小野清について

問 大阪城の研究書としては最高の名著「大阪城誌」の著者、小野清は仙台の人であると聞いてますが、その略歴を知らせてください。

答 弘化3年〔1846〕9月、仙台北五番丁に生れた偉大な博学者であります。字は子肅、通称伊右衛門、号は静修。幼時読書及び書道を白石権太夫〔林子平の墓碑銘を揮毫した書家〕に学び、9才の時養賢堂に入り、10才で四書五経の考試に合格して、第13代伊達慶邦から「小学」及び「近思録」を賞賜されました。慶応2年〔1866〕江戸に留学し、大学頭林学斎・幕儒芳野金陵に学び、剣道を桃井左右八郎（小野派一刀流）・千葉道三郎（北辰一刀流）・小田善速（影山流）に学んで、文武両道を究めました。丁度この頃奇しくも、林大学頭の家の中の軍事教師に招かれていた星恂太郎〔後の額兵隊長〕との林邸内における出会いがあります。

慶応4年〔1868〕仙台が会津討伐の勅命を受けた際、副参謀として出征しました。戦後、静岡でフランス語、横浜でドイツ語を修め、更に慶応義塾で英語を学びました。明治8年〔1875〕福沢諭吉の推薦で内務省衛生局に勤め、東京・横浜・大阪の各司薬場〔衛生試験所〕の創立に当たりました。のち本省に戻り、わが国最初の医師開業免許制度を樹立しました。

その著書に、「日本城郭誌」「大阪城誌」（全12巻、明治32刊）「刑法一覧表」「天文要覧」「安土城誌」「江戸城誌」「名古屋城誌」「伏見城誌」等があり、いずれも充実した大作であります。特に「天文要覧」は、明治元年京都に赴く時、天文学者古山貞と同行し、毎夜宿で天文学の手ほどきを受けたことが基礎になったのだといえます。翌2年、横浜にあったドイツ公使館員ドクトル・ベルソンからドイツの星図を示されて大いに感奮し、印度・支那・日本のあらゆる天文書を涉猟し、50年の歳月にわたって心血を注ぎ、大正4年〔1915〕完成し、天覧にも供した名著であります。

小野清は、仙台藩の第5代伊達吉村時代、江戸芝邸の奥方に30余年仕えた首席老女歌島の局の孫に当り、額兵隊の鼓手から後に陸軍歩兵大佐となった島野翠がその実弟です。永く他郷にありながら、強い愛郷心の持主でありました。絶えず卓越した研究業績を生み出すかわら、常に県人とのよき交わりを続け、偉大な先輩として尊敬されました。その一つとして、東京の城北宮城県人会の